

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例
-------	------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

奈良県御所市

○学校名

御所市立大正中学校

○学校のURL

なし

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各2学級、【特別支援学級】 【合計】6学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】128人（平成27年11月1日現在）
（内訳：1年生41人、2年生46人、3年生41人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成9、10年度 人権教育研究推進事業人権教育研究指定校
平成17、18年度 人権教育研究推進事業人権教育研究指定校
平成25、26年度 人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「一人一人の個性が輝く生徒の育成」

【人権教育に関する目標】

自尊感情の高まりと共感的理解の深まりをめざす集団づくりと自主活動の活性化

○人権教育に係る取組一ロメモ

自他のアイデンティティを理解し尊重する態度を育成するために、本校は「自分のこと」を見つめ合い、語り合い、聴き合う集団活動を重視している。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・ 全教職員による宿泊を伴う実践交流会の実施（年2回）
- ・ 地場産業体験学習、大阪鶴橋コリアタウンフィールドワーク
- ・ 生活班による学校生活
- ・ 部落解放研究会（部落研）・障害者問題研究会（あすなろの会）の活動（地域の方からの聴き取り学習、福祉作業所との日常的な交流、文化祭での劇発表など）
- ・ 「自分のことを語る」＜集中HR（1年野外活動、2年海洋実習、3年修学旅行）部落解放研究会夏期合宿（「龍神合宿」）＞など

3. 特色ある実践事例の内容

◆「自分のことを語る」

1. 取組のねらい

一人一人の生徒が「個性を輝かせる（学校教育目標）」力の源泉に位置づけられるのは自己肯定感や自尊感情である。しかし肯定、尊重すべき「自分」とは一体何なのかわからないまま、自分を肯定しよう、尊重しようとしてもそれは絵空事である。明らかなことは、ここにいる自分は今、偶然にこの場に出現したのではなく、この世に生を受けてから現在に至る生い立ちや経験の中で創られてきたということである。いろいろな人や物事との具体的な出会いの結果の全てとして今の自分はある。誰にもとって代わることはできない、たった一つのオリジナルとしての自分がここにいるのである。本校では、そのような「かけがえのない自分」としての自覚が、自己肯定感や自尊感情の醸成につながるという考えのもと、自分につながる事実と向き合い、自分をより深く理解するための手だてとして「自分の事を語る」取組を行うことにした。

2. 取組を始めたきっかけ

本校には、全体の約半数を占める部落出身の生徒、あるいは一人親の家庭、経済的に困難な家庭から通う生徒が、一般的な比率より格段に高い割合で在籍している。そのような生徒にとって「自分のこと（家族関係、生活実態、社会的立場、その中での成育歴や置かれている現実など、現在の自分につながる全ての状況）」は、将来の人生にマイナスに働くかもしれない要素であり、かつ今現在の困難にかかわる切実な事実である。

誰よりも、そのような状況に対する負のイメージを持つ生徒たちにこそ自己肯定感や自尊感情を育みたい。そのためにはこれまで目をそらしてきた、しかし決して忘れることはできなかった「自分のこと」を見つめさせ、「目をそむけたい、恥ずかしいこと」としてのそれを、「恥ずかしいけれど、まぎれもなく今の自分を創っている（きた）こと」として捉える視点を持たせるための取組が必要であると考えた。

その考えは「自分のことを語りきり本当の仲間をつくろう」という標語で、各クラスはもとより、生徒会そして部落解放研究会や障害者問題研究会などの自主活動サークルなど、学校の全ての生徒活動、及び仲間づくりの根幹に据えられている。

3. 取組の内容

その取組が、各学年次、クラスで行われる「自分のことを語る会」（以下「集中HR」と言う。）である。これは、以下の各学年の宿泊行事の場で、宿舎の大部屋を借りて行われる。

1 年次・・・野外活動

2 年次・・・海洋実習

3 年次・・・修学旅行

ここでは、集中HRの具体的な有様を生徒や教師の作文や手記から紹介する。

“このクラスには、生活にしんどさをかかえている子供がたくさんいます。この集中HRが子供たちにとって、特に生活課題をかかえる子供たちにとって、自分の生活と向き合い、お互い語り合える場になればと私は思いました。そんな折り、子供たちだけではなく教師自身も自分と向き合っていないと子供たちと向き合うことができないということを先輩から指摘されました。

私は6月の修学旅行に向けた4月半ば、子供たちに集中HRの意味を説明した後こう言いました。「実は私も恥ずかしい話、誰にも言えてないことがあるねん。私、みんなに自分としっかり向き合って話してほしい、って言ったけど、私自身は本当に向き合えてるのかなあって思った。だから私今回決意した。私自身も今まで封印してきた過去をしっかりと見つめて、集中HRで語る。」その日から私の「自分との向き合い」がはじまりました。子供たちも「自分との向き合い」「私（担任）との向き合い」をはじめてくれました。HRで何を語るかについて、休み時間の個別面談、放課後の班会議、家庭訪問等で話し込む毎日が続きました。”（クラス担任）

本校ではこの取組を成立させる条件として、日常の学校生活での集団づくりを大切にしている。生徒たちは日常の学校生活を、5～6人で構成される「生活班」という単位で過ごしている。生活班では班員が毎日机を接し授業にのぞみ、学校生活を送ることになる。生い立ちも感覚もちがう相手どうしが日常的に接するため、なかまのゆれ、悩みが直接伝わることによって、けんかもあればめ



文化祭クラス劇で集中HRを再現

事もある。そんな経験を通して仲間にはそれぞれの生活があり、生い立ちがあり、「らしさ」があるのだということを実感していく。班の中での日常的な交わりという土壌があって、初めて語りあう関係が成立する。

上記担任のクラスのAが集中HRで語った内容を紹介する。Aは入学当初みんなの前で家族のことを語るどころか、友達にささいな自分の気持ちすら伝えることのできない生徒だったという。

“僕の家族はお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんと僕の4人です。

母は僕が小学校1年のときからいません。なぜ出ていったのかは、そのときの僕にはわかりませんでした。会いたい気持ち、さみしい思いでいっぱい、当時はその気持ちしかありませんでした。そして、僕は、母親が仕事に行って帰ってこないだけだと思っていたので、僕が頑張っ

ていたら帰ってくると思いこんでいました。

僕は、ずっと母を待ちながら勉強やクラブ活動を頑張り続けました。

つい1週間ほど前、僕が勉強していたときに父親が部屋に入ってきて、「お母さんに会いたいかな。」と聞かれました。僕は、「うん」と答えました。その後父親は母親と離婚したと言いました。僕は、父親に言いたいことや聞きたいことがあったけど、父親の気持ちを考えるとさえませんでした。だから、今度聞こうと思います。

最初に言われたときは、正直に言うと受け入れられなかったです。寂しい気持ちやママがもう家に帰ってこない悲しさ、残念さなどいろんな気持ちがでてきました。でもいつもならこういうことを聞いたら泣く僕だけど、強くなろうって決めたし、ママやパパにもいろいろ事情があると思ったので受け入れられました。そういうふうになれたのも、英語部に入って、龍神（※1）に来たり、あすなる会のボランティア活動、大切な友達や先生方の支えのおかげで今の僕があると思います。だからこの調子でやっていきたいです。

ぼくは、心の強い人は、つまり誰かのために精一杯何かできる人だと思っています。そんな心の強い人になりたいです。これからも夢に向かって成長していきたいと思っています。”

※1 龍神＝龍神合宿（次ページ参照）

「強くなりたい」と語ったその後のAは、文化祭の劇、近隣の福祉作業所でのボランティア活動、そして自分自身の高校進学へ向けた真剣な学習など自分にできることに精一杯取り組んだ。集中HRの場では、Aのような家族関係に関わることを始め、同和問題に関わること、身体に関わること、あるいはAよりももっと厳しい家庭環境に関わることなど、実に多様で具体的な「自分のこと」が語られる。

“おれ（B）は、中友（※2）行くのがめんどくさかってさぼったときもあった。そのときおとうさんにすごく怒られた。お父さんは部落出身で、ある日お父さんがお母さんと話しているのを聴いた。「Bも室長とかやってがんばってるし、自分も中途半端やったらあかんと思って、売薬の得意先一軒一軒で自分のこと話していったんや。そしたら得意先が半分ほどになってしまった。」そのこと聞いて、自分もはんばなことでたらあかんと思った。お父さんも結婚のとき、母が部落の人とちがうから反対を受けたらしい。前に他の中学の子とつきあっていたけど自分が部落民やって言ったら、そこからピタッと連絡がこなくなった。これも差別かなって思う。・・・僕はお父さんを尊敬してるし、これからも絶対差別に背を向けへん。”

※2 中友＝中学生友の会。地域で行われている学習会。人権学習や教科学習を行う。

“初めてみんなに自分の病気のことを話してすごく気が軽くなった。私にとってこの病気は本当にいやなことで、休んだ次の日に「なんで休んだん？」と聞かれても「・・・ちょっと。」ってごまかしてはつきり言えなかった。何度もちゃんと言おうと思ったけど、そのこと言ったらきられるとか思ったり、そんな自分がいやだった。言ってみてCちゃん、Dちゃんの言葉、本当にうれしくて涙が止まらなかった。Dちゃんと一緒に班で頑張っていける。本当にそう思いました。私は、はじめははつきりいってどうにもならないようって思っていたけど、自分のことを言うことによってなにか関係が深まるのではないかと思いました。”

“みんなの話を聞いていて、一人一人の思いが伝わってくるようでした。私には両親が2人ともいてないから、それ以上にみんなの両親を大切にしてほしいと思いました。たとえどちらがいなくても親は親なんだから大切にしてほしいと思いました。私の家も笑える家じゃないから、笑える家にしていきたいから私自身努力していくつもりです。この集中HRは、私の思い出、心に残るでしょう。忘れることはありません。”

何名かの語りを紹介したが、その内容は、語ることは今の自分と向き合う事であり、今の自分を乗り越えていくことであることを示している。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

1. 課題

「自分のことを語る」取組は、確実に生徒の中に自尊感情の高まりと、集団に共感的理解の深まりをもたらしている。しかし、マイナスイメージとして重くのしかかっている事実をクラスの全員が、教師の生半可な指導で語ることはありえない。語ろうとする事実が、生徒の心の中で深刻さを増せば増すほど、当然それは口には出したくない事実になる。生徒がどこまで語ることの大切さを理解するか、それも建前ではなく実感として「自分と向き合う」作業の意味を理解するか、ひるがえって言うなら、教師がどれだけ生徒にそのことを理解させられるのかということが、いつも大きな課題としてのしかかる。そうならば、まず教師が自らの有様を示すことによってしかそれを克服できないのは当然であり、前述の担任のように自らが率先して自分と向き合っていこうとする姿勢が必然的に生じてくる。



2. 課題に対する対応

そのような教師の取組の一方で、クラスでの

龍神合宿で「自分の事を語る」

集中HRとは別に、「自分のことを語る」もう一つの大きな場が龍神合宿（和歌山県龍神村「山の家」を借りて毎年夏休みに行われる2泊3日の部落解放研究会集中合宿。）である。部落解放研究会は人権問題について考え、差別と闘う生き方を探求することを目的として活動している校内の自主活動サークルである。ここでの活動には部落出身生徒だけではなく、人権問題に興味をもっている生徒、クラスの仲間関係をもっと深めたいと思っている生徒等、何らかの「想い」や「志」をもっている生徒が自主的に参加してくる。龍神合宿では毎年、先輩やOBからの聴き取り学習が行われるが、話の内容の多くは中学校時代の仲間関係やHR活動などを通して、いかに自分と向き合うことの厳しさと尊さを学んだか、そして後輩たちにはクラスの中でのそのような活動のリーダーになってほしいというものである。

この龍神合宿で学んだ生徒たちが、クラスへ戻ったときに、リーダーとして集中HRを牽引するという構図ができあがる。祖母に育てられながら、母親に関わる重い事実を背負って生きてきたEもそのような生徒の1人である。部落研顧問の手記を紹介する。

“Eの母親はある深刻な事情で家にいないため祖母に育ててもらっている。母のことがEの体全体にとてつもなく大きくのしかかっている。そんなEはこの龍神合宿に1年生から参加し、Eより1つ上の先輩の「語り」を聞き衝撃をうける。この先輩は部活動の先輩でもあり、その後ろにはやはり厳しい生活背景があった。先輩の語りは、自分の生い立ちを真正面から見つめるものだった。自分にとって「負」のことであり「恥」であることを人前で堂々と語っている。これからの自分はどうあるべきなのかをこの先輩は語っている。それに比べて自分はどうか、これから自分はどのようにしていくべきなのか、母のことをどう捉えてくべきなのか、突きつけられた。”

Eは、学校へ戻ってから家のことを巡って様々な葛藤を繰り返し、時には学校生活で「くずれ」や「荒れ」をみせるようなこともあったが、龍神での先輩の話が、それをストップさせる「つかえ棒」の役割を果たしていた。その彼が2年生のとき、クラスの集中HRで、彼の葛藤の根にあった母のことを語った。Eの語りは、その内容もさることながら、涙をこらえて必死に母の事実と向き合おうとするその姿も含めて、クラス全員に自分と向き合うことの意味を深く考えさせることになった。Eの作文を紹介する。

“始めは自分のことホンマに語れんのかって自分の中で思ったけど、やっぱり答えは出やんかった。学校でも家でも荒れてたから。でも龍神でF先輩の話もきいて次の集中HRでは絶対言おうと決めたし、先生に「正直に言いたいこと言え」って言われたとき、めちゃうれしかった。ホンマうれしかった。やっと自分の中のモヤモヤがとれるんかって思ったからうれしかった。・・・そしてみんなもいっぱい自分の家のことを語ってくれた。みんなもいっぱいしんどいことあるんやなって思った。俺のことにもいっ

ばい感想を返してくれた。ホンマうれしかった。”

このように全員が語る意味を理解するという課題の克服に、リーダーの存在は不可欠である。当然それを指導するのは担任であるが、リーダー合宿ともいべき龍神で学んだ生徒が、その学びをクラスに経験とともに伝えるサイクルが成立する。

5. 実践事例の実績、実施による効果

このように「自分を語る」取組は、確実に自尊感情や自己肯定感を高める効果をもたらしているが、それは決して生徒だけではない。冒頭に手記を紹介したクラス担任を始め、取組を通して生徒に向き合う教師自身も、自らの生き立ちと向き合うことになる。2人の教師の手記を紹介する。

“私は「語る」ことによってその人に自信や誇りが出てくると思っている。集中HRをくぐりぬけて以降、子供たちは劇的に変化した。周りのことを考えられるような集団に成長していった。また私自身がそうである。自分の父親のことを考え、父親に思いをはせ、それを生徒に語った。その中で自分のことを「かけがえのない存在」として初めて認識することができた。自分をかけがえのない存在として認識して初めて、相手を「かけがえのない存在」として認めることができる。わざわざ人前で語る必要はない、そんなことは恥をさらけ出すだけだと思う人も少なからずいると思う。しかし私は絶対にそうは思わない。なぜなら子供たちがその答えを出してくれたから。”

“「語る」取組の中でいろんなものと向き合い、私につらくあたっていた私の母も義母のプレッシャー、そして世間体からの目にしばられていたんだなあと思えるようになりました。そのような母のしんどさを理解した上で、母と同じようにならないためにも私自身が過去のしんどいことにしばられてはいけないと思うようにもなりました。取組の中で子供たちは大きく変わりました。ここ最近では勉強から逃げていたGちゃんが、志望校へ行くために放課後学習で毎日残っている姿が目にとまります。しかし、一番変わったのは私自身です。この取組での学びが、これまで子供を指導する際に余りにも軽かった私の言葉を重いものにしてくれました。”

6. 実践事例についての評価

生徒にのしかかる「不安定」な家族関係、生活実態の「低位性」が、学校生活における学習意欲の低下や問題行動に直結するという図式が本校に当てはまらないことは決してない。

それどころか、厳しい現実ゆえに本校は過去何度かの大きな教育荒廃を経験している。その原因を家庭や地域の問題に求めて嘆くだけでは、学校の存在意義はないに等しい。幾度の教育困難と向き合いながら、本校が得た教訓は、「不安定」で「低位」なのは、その家族や生活ではなく、それを「不安定」で「低位」と捉える生徒自身の感情、強いては彼らにそのような負の感情を持たせてしまう学校の有様では

ないか、ということである。「そこに生まれたことが恥ずかしいのではなく、そこに生まれた事を恥ずかしいと思う自分自身が恥ずかしい。そう思わせる社会が恥ずかしい。」人権聴き取り学習の際にある講師が話された言葉である。

どの生徒にもその存在には理由がある。今の自分を創った「自分のこと」がある。それゆえに、一人一人どの存在も等しく尊い。すべての生徒がお互いの「自分のこと」を認め合う学校にするために欠かすことのできない取組として「自分のことを語る会」がある。

複雑な家族関係を背景に、入学時から様々な問題行動を繰り返していた生徒が2年次の集中HRで「自分のこと」の後に語った決意を紹介する。

“うちは家のこと、全部言ったけど、みんなもけっこう悩んでると思うねん。うちは人に言えるんやったら言った方がいいと思う。親、友達、先生、大正中の先生はみんないっしょうけんめい話きいてくれるし、よくしてくれるから。みんな絶対ええとこ、悪いとこあると思う。そんなんとかも全部わかっていけるような仲にうちはなりたいなって思うねん。区別つけて空気読めるようなクラスにしたいと思ってるねん。そんなクラスにできるようにしていこよ。「うわべ」じゃなく「ほんま」の友達っていうのが何なんか、わかるようになる。せやから、しんどいことあったら言うてきてよ。うちも言おって思ってる。何でも言いあっていこ！ほんで「大正中で良かったな」「2Bで良かったな」ってほんまに思えるクラスにしていこ！

前までのうちやったら多分こんなこと考えられへんかったやろうし、こんなことしゃべろうとも思わなかったけど、今は自分自身変わりたいし「2年になって勉強もする！」って言うたし全部がんばっていきたいねん。だから自分から逃げられへんようにみんなにも言うて変わっていこ！って思ってるねん。”

語ることを通して高まってきた自尊感情や自己肯定感が、現在の自分を受け入れるだけにとどまらず、未来に向けたより良い自分を実現していこうとする意欲につながることをこの語りは示している。

この生徒は高校へ進学したものの、学習意欲に課題を抱えつつ中途退学した。現在一人の家庭人として、小学校のときに失われてしまった「家族」を取り戻すべく奮闘している。あのとき頑張ることを決意した未来を、今生きているわけであるが、目の前に壁が立ちふさがったときに母校を訪ねて来るその顔は、クラス全員の前で「自分から逃げない」と語った中学校在学時と変わらない。

学校が一人一人の生徒の個性が輝く場になったとき、それは一人一人の自己実現への展望を保障する場になるということである。そのような学校の実現に向けて「自分のことを語る」取組をこれからも教育活動の根幹に据えていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

奈良県御所市立大正中学校

自己肯定感や自尊感情の醸成には、まずもって「かけがえのない自分」としての自覚が不可欠であるとして、自身をより深く理解するために、「自分のことを語る」場面の設定を重視している。様々に困難な状況にある生徒たちが、自身の現状を「目をそむけたい、恥ずかしいこと」として捉えてしまうのではなく、肯定すべき、尊重すべき「自分」を見いだすことができるように、学校、各学年次、各クラスでの「自分のことを語る会」（集中HR）や、校内の自主活動サークルによる集中合宿など、生徒や教師が自分自身を語る機会を、意識的に設定している。個別的な人権課題（人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕）、各人権課題に対する取組（人権教育・啓発に関する基本計画）を推進する実践事例である。